

## 2026年4月5日 イースター礼拝メッセージ

聖書:ヨハネの福音書20章19～23節

説教:傷ついた姿を示すイエス

はじめに

先週は受難週ということで、イエスが語られたことば、「女の方」と「わたしは渴く」、この二つのことばに目を留めながら、十字架のできごとを振り返りました。今日はそれから三日経った週の初めの日、つまり日曜日の夕方、弟子たちのところに現れた主が何をされた二つのことに目を留めます。一つ目は手と脇腹を示されたこと。二つ目は「平安があなたがたにあるように」と語られたこと、この二つのことを通して、復活の主に近づきたいと思います。

### 1 イエスと弟子たち

#### 1) おびえて戸に鍵をかけていた

まずイエスが現れてくださったときの弟子たちのようすですが、19節前半にこう記されています。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。」イエスが重大な犯罪を犯したということにされた以上、とうぜん弟子たちにもも捜査の手が及び、死罪になる可能性があります。恐くなった弟子たちは、戸に鍵をかけ隠れてしまいます。

弟子たちはかつてどんなことを言っていたでしょうか。ペテロを筆頭に弟子たち全員が口をそろえてこう言っていたのです。「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」(マタイ26章35節) かつてのいさましい約束はどうなったのでしょうか。いまやぶるぶる震えながら戸に鍵をかけて隠れている。その真ん中にイエスが立ちました。弟子たちは嬉しかったとありますが、素直に喜べたとはとても思えない。まず先立つのは恥ずかしいという思いではないですか。日本語に「あわす顔がない」というのがありますが、まさにこのことです。

弟子であれば、真っ先に先生を守らなければならないのに、肝心なときにイエスを見捨てて逃げてしまいました。ふつうであればこんな弟子は破門、出入り禁止になって当然です。

#### 2) 真ん中に立つ

ところがイエスはどうされたか。19節後半。「すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。『平安があなたがたにあるように。』」ユダヤ人に見つかったらどうしよう。もし見つかったら、自分たちがイエスの仲間ではないということをどうやって弁解しようか、そんなことばかり考えていた弟子たちの真ん中に、イエスは立って下さいます。そのときイエスして下さった二つのことを見ていきます。

#### 3) 手と脇腹を示す

まず一つ目ですが、イエスをご自分の手と脇腹を弟子たちに見せます。どうしてでしょうか。すぐに思いつくことは、今日の前に立っているのは幽霊でないし、顔がそっくりの別人でもない。ここに立っているのは、まぎれもなく三日前ゴルゴダの丘で十字架で死んだイエス本人であることを示すため。確かにそのとおりです。しかしそれだけなのでしょうか。まだなにかありそうです。

#### 4) 「平安があなたがたにあるように」

そのように考える理由があります。それはイエスがして下さったことの二つ目とも関係してきます。イエスが弟子たちの真ん中に立たれたとき、こう言っておられます。「平安があなたがたにあるように。」ユダヤ文化では、「こんにちは」「お元気で」「ご無事で」というような意味で使われることばだそうです。弟子たちと別れてから数日経っていますから、ごく自然なことにも見えます。しかしイエスは、ご自分の手と脇腹を示されてからもう一度「平安があなたがたにあるように」と言われるのです。単なるあいさつだと考えると、少し不自然な気がします。

もしかしてこういうことでしょうか。たとえば事故にあって傷口がぱっくりと裂けて肉や骨まで見えたら、気持ちが悪くなって倒れる方もいます。弟子たちも、イエスの手と脇腹にある傷口を見て気絶しないようにとの気遣いから、二度も「平安があなたがたにあるように」と語ったのでしょうか。

### 2 イエスにからだに刻まれた傷

#### 1) 罪を思い起こさせる

イエスがなさることはいつも深いものがあります。主をご自分の両手と脇腹を示して下さったと

ぎ、弟子たちはどんな思いでそれを見たのでしょうか。科学者のように冷静に観察したのか。それとも気も動転して、すぐに医者に診せなければと騒いだのか。弟子たちの心に迫ってきたのは、だれがこの傷をつけたのかということではないでしょうか。ほんとうは主を守るべきであったのに、主を見捨てて主の手と脇腹に深い傷を負わせ、死に追いやった。主を裏切ったという罪の意識が生まれてきます。主の傷を見てわが罪の深さにうなだれるほかありませんでした。

## 2) 平安を与える

でもそのとき主はどうされたのでしょうか。傷口を見せる前と見せてから二度、「平安があなたがたにあるように」と繰り返しました。弟子たちを責めるために傷口を見せようとしたのではありません。ここにあなたがたの本当の平安があるのだと教えておられるのです。それであれば最初から傷口など見せなくてもよいのでは、と思うのでしょうか。

でも私たちは、自分がしてきたことをうやむやにしたり、見なかったことにするわけにはいけません。本当の平安をいただくために、まず私たちは主の傷を見なければなりません。そこから目をそらしてはいけません。それがスタートだと教えています。もちろん簡単なことではありません。だからなんでも「平安があなたがたにあるように」と言って私たちに励ましてくださるのです。

## 3 主の打ち傷が示すこと

### 1) 私たちを癒やす

イザヤ書53章5節にこうあります。「しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」

イザヤも主の傷口が私たちが癒やすと語ります。ここから二つのことを挙げることができます。一つ目。私たちは主とどこでつながるのか、ということです。たくさんあると思うかもしれませんが。そうではない。一つしかありません。主のからだに刻まれた傷、そこで私たちは主とつながるのです。その傷口を通して平安をいただき、癒やされていく。救いはどこにあるのか。主の傷です。ほかにはありません。

### 2) よみがえり

そして二つ目。私たちの罪ゆえに死んで下さった主がよみがえられた。そのことを私たちはどこで確認するのか。たくさんあると思うのでしょうか。一つしかありません。主のからだに刻まれた傷を見ることによって、主が死からよみがえられたことをはっきりと確認することができます。このように、主が示してくださった手と脇腹は、私たちの罪からの救いと主のよみがえり、この二つの事が凝縮されていたのでした。

### 3) 弱い私たちにも

この恵みをだれが受け取ることができるのでしょうか。よみがえられたイエスは、ご自分を見捨てて逃げていった弟子たちの真ん中に立たれました。彼らが何かよいことをしたから来たのではない。むしろ反対に、イエスに背を向けて一番弱くなっていたときに主は来てくださり、弟子たちを励まし。もう一度立たせていくのです。

私たちだっていつどこで主に背を向けてしまうかわかりません。もしそうなったとしても主は私たちに追いかけてきて、ご自分の傷ついたからだを見せることでしょう。そこに私たちのほんとうの喜びと平安がある。これを見て、もう一度立ち直りなさい。このようにして励ましてくださるにちがいません。

死からよみがえられた主の御名をあがめたいと願います。